

ヴェーバー、シュッツ、ルーマンの社会学理論をめぐる一考察
——フッサールの現象学との関連性を考慮しつつ——

A Study about the Social Theories of Weber, Schutz and Luhmann
— With Referring to Husserl's Phenomenology —

宇都宮 京子
Kyoko UTSUNOMIYA

I 序

マックス・ヴェーバーは、自らを「歴史学派の子」と呼び、歴史的視点を含んだ彼独自の社会学を展開したが、「時間」そのものをその研究テーマとして取り上げたことはほぼなかったと言ってよいだろう。彼にとって重要だったのは、まず、歴史学においては、出来事がどのような影響のもとで展開したかであり、ある出来事を引き起こした出来事を因果帰属という方法で探していくことであった。それは、この出来事（A）がなかったとしたら、その後のこの出来事（B）はこのようなかたちで起きたらどうかと問いながら、引き金（原因）となった可能性のある出来事を探し、それらの影響の大きさに順位を付けていく思考実験として行われた。それらの原因と思われる出来事の中でも、この出来事（A'）がなかったとしたら、のちのこの出来事（B'）が起こった可能性はほぼないと思われるような出来事を見出した場合は、A'とB'との関係は、「適合的因果連関」と呼ばれる（Weber 1906=1965, 207）。そして、この因果帰属は、「客観的可能性の範疇」を用いて行われる「客観的可能性判断」であり、「適合的因果連関」や「客観的可能性判断」などの概念や考え方は、刑法の考え方と関連があるとヴェーバーは、論じている（Weber 1906=1965, 182）⁽¹⁾。

ヴェーバーの理解社会学にもこれらの概念や方法は用いられており、行為の経過や結果から動機を推定するために客観的可能性判断を行うのは、研究者や観察者である。時間との関係で言うならば、ヴェーバーにおいては、出来事の連鎖とそれら間の影響関係が重要だったのであり、上述したように時間そのものがテーマとして論じられることはなかった。

そのヴェーバーにおける時間的視角の欠如を、フッサールの現象学や、ベルグソン、マックス・シェーラーらの哲学を参考しつつ批判したのは、アルフレッド・シュッツであった。

そのシュッツは、フッサールの見地に沿って、観察者の視点と行為者自身の視点との関係に留意し、間主観的世界がいかに成立していくのかという問題に取り組んでいた。しかし、時間について論

じる際には、「みな、一緒に年をとる」といった見地に立ち、フッサールの現象学とは距離を取るようになった。そのシュッツの時間をめぐる見地に賛意を示したのは、ニクラス・ルーマンであった。そのルーマンの時間概念は、フッサールの「地平」をめぐる考え方と深く結びついているが、そこで重要な役割を果たすのは、「期待」という概念であった。ヴェーバーの理解社会学における「諒解」概念にとっては、この「期待」という概念が重要であるが、ルーマンは、簡単にはあるが、ヴェーバーの諒解概念に言及している。本論文では、これらの研究者たちの諸見解の関係を、現象学的見方を視野に入れつつ、検討したいと考えている。

II シュッツのヴェーバー批判と時間観念

シュッツは、ヴェーバーとフッサールから多大な影響を受けて、彼の「現象学的社会学」を展開したが、シュッツが行ったヴェーバー批判の要点の1つは、ヴェーバーにおける時間観念の欠如だった。たとえば、「目的行為の意味（動機）」という場合、行為の始まりの際に抱いた目的、すなわち、将来において達成されるべく未来完了的に予想される行為の結果（目的動機）を指すのか、それとも、行為が行われて完了してから、反省的にその行為の結果を評価したその内容（理由動機）を指すのか、両方の場合が考えられる（Schutz, 1932=1982, 122, 126）が、その点の時間の観念を含んだ区別がヴェーバーにおいては不明瞭だとシュッツは批判している（同上書、89）。

この点と深く関連して、シュッツは、以下のように述べている。「ヴェーバーは経過としての行為 *Handeln* と既に完了した行為 *Handlung*、産出活動 *Erzeugen* の意味と産出物 *Erzeugnis* の意味、自己の行為と他者の行為あるいは自己体験と他者体験、自己理解と他者理解を区別していない。彼は行為者がいかに意味を構成するかについて問題にしないし、またいかに意味が社会的世界における参与者や局外の観察者によって修正変更されるものであるかについても問題にしていない」（同上書、19）。ここでシュッツは、「たしかにヴェーバーは、行為の主観的に思念された意味内容と行為の客観的に認識できる意味内容とを対比している」（同上書、19）ことは認めているが、それは限られた考察であったことを問題にしている。シュッツは、より哲学的に、意味と理解の本質に迫ることができると考えていた。つまり、これは、行為者が、自分の体験をどのように把握するのかという問題と関係しており、フッサールが、意味作用と意味内容とを区別し、何かを志向している自己の意味作用そのものは認識できず、志向の作用のなかで構成される意味内容のみが体験内容として認識されると述べたこと（Husserl, 1901=1974, 146, 175）に基づいている。それゆえ、意味として把握できるのは、反省的に捉えられた内容でしかないことになる。

さらにシュッツは、「意味問題は時間問題」であると考え、特にその時間問題は「内的時間意識の問題」であると述べて、「体験者にとって体験の意味が構成される、常に固有の持続意識の問題」であると書き、また、「ベルグソンの持続の哲学やフッサールの超越論的現象学のような意識の一般理

論に助けられてはじめて、意味措定現象や意味解釈現象の問題につきまとう難問の解決が図られるのである」と書いている (Schutz, 1932=1982, 24)。また、「あらゆる経過中の行為は、時間のなかで、もっと詳しくいうと、内的時間意識のなかで、*durée* のなかで履行される。それは、持続—内在的である。これに対して成果としての行為は、持続—内在的な自己履行ではなく、むしろ持続—超越的な履行済みの存在である」と述べている (同上書、55)。そして、彼は、ヴェーバーの理解社会学中の概念について、「行為者がその行為に意味を結びつけるというヴェーバーの命題は、一体何を意味するのか」、さらに、「行為者は、彼が行為の経過のなかで体験するような *durée* のなかで自己を構成する意識経過に意味を結びつけているのか、それとも彼の成果としての行為、既に経過し、完了し、構成されてしまっている彼の履行した行為に意味を結びつけているのか、どちらであろうか」(同上書、55)と問うている。シュッツ自身は、「意味」という概念を、「ある自分自身の体験に向ける特定の眼差しの方向を言い表わす」と考えていた。「持続の経過のなかで素朴に惰性的に生きている私たちは、もっぱら反省作用においてこの自分自身の体験を縁どりされた体験として他のあらゆる体験から『際立たせる』ことができる。したがって意味は、自我の持続の経過に対する特殊な構えを指している」というのである (同上書、58)。

さらにシュッツは、ヴェーバーが、「直接的理解」と「説明的理解」とを区別していることを批判している (同上書、37)。たとえば、ヴェーバーは、 $2 \times 2 = 4$ といった命題の意味や怒りの爆発などを研究者や観察者は直接に理解すると述べて、なぜ、人々がその行為を行ったのかを考慮する動機的理解と区別している。しかし、シュッツは、この2つの理解の区別は「恣意的なもの」であり、「どちらの場合にも解釈者には客観的意味連関が与えられながら、どちらの場合にも主観的意味の把握は閉め出されている」と述べている (同上書、43)。すなわち、「動機」の探求は、観察者に与えられている客観的意味から行なわれているのである。シュッツは、フッサールの見地に沿って、主観的意味と客観的意味とを考察している。彼は言う。「フッサールの『論理学的研究』以来、私たちは作用としての意味づけ *Bedeuten* と一切の可能的作用の多様性に対するイデア的統一としての意義 *Bedeutung* とを区別することを知っている (同上書、47)。……私たちがある表現を客観的と呼ぶのは、その表現がその音声的現出内実によってのみその意義を拘束している場合、ないしは拘束しうる場合であり、したがってそれを表明する人物やその表明の事情を必ずしも顧慮しなくとも理解しうる場合である。これに対して表現が本質的に主観的かつ機会的であるのは、次のような場合である。即ち『……概念的・統一的な一群の可能的意味を包含しつつも、その時々有機會に応じて、つまり話し手とその状況に応じて、その都度の明示的意味を方向づけることが、本質的に重要であるような表現』⁽²⁾ の場合である」とフッサールの言葉を引用しつつ述べている (同上書、48)。

しかし、この客観的意味という概念は、大きな問題を含んでいる。シュッツは、「自我によるこの世界の一切の意味付与は、この同じ世界を汝自身が体験において経験する意味付与を参照しており、そのようにして意味は、間主観的な現象として構成されているのである。……認識の現象学のこのきわめて難解な根本問題は、フッサールの『形式論理学と超越論的論理学』のなかで提示されてはいる

が、依然解決されていない」(同上書、47)と書いている。シュッツは、これらの中期や後期のフッサールの著作に大いに影響を受けているが、本書完成後にフッサールによって発表された『デカルト的省察』における他者理解や関主観的世界の成立をめぐる見地には賛成することができず、フッサールの見地と明確に袂を分かつことになった。

その決別につながる論点は、「同時性 (Gleichzeitigkeit)」をめぐるものであった。汝と私とがある特殊な意味で「同時的」であること、両者は共存すること、私の持続と汝の持続とは交差すると述べている。つまり、シュッツの見地では、「私は、私の固有の体験を経過し生成してしまった体験」として反省作用によって捉えることができるだけなのに、他者の体験に目を向ける際には、その実際の経過を眺めることができるというのである。そしてシュッツは、ベルグソンが、その著作『持続と同時性』で論じていた内容に賛意を示しつつ、「……これに対して汝の持続は、私の持続がそうであるように、純粹な *durée*、つまり自己自身を体験する連続的で、多様で、しかも不可逆的な *durée* である。……汝に私の *durée* が絶対的現実として与えられるように、私には汝の *durée* が絶対的現実として与えられるのである。私たちが2つの持続の同時性によって理解しているものは、もっぱらこの事実——共に年老いるという事実——に他ならない」(Schutz, 1932=1982, 142-143)と述べている。しかし、少なくともフッサールの『イデー』を参考にする限り、自己の持続であろうと汝の持続であろうと、すべては一度括弧に入れて現象学的還元を施す必要があると考えられるのであり (Husserl, 1913 [1950] = 1979, 243)、他我がなぜ、我々にとって「他我」であり、事物と違う現れ方をするのか、という問題は、『デカルト的省察』に見られるように、「現象学的還元の自我論的初形態を相互主観的還元の最終形態へと完成させる」(Husserl, Funk, 1932, 1933/4, 6) というような、何らかの特別な解釈を必要としていたと思われる。しかし、フッサールによって行われた「最終形態への完成」の方法に、シュッツは満足することができなかった。シュッツの「共に年老いる」ことを前提とすることは、現象学的視点に立って、関主観的世界の構成を考えるということを放棄することを意味している。「他者の体験に目を向ける際には、その実際の経過を眺めることができる」と述べても、その体験内容が「実際」のものかどうかを裏付けることはできないからである。

Ⅲ マックス・ヴェーバーと理解社会学

i) ヴェーバーの見地と時間観念・歴史学

観察者と行為者自身との関係は、ヴェーバーにとっても重要な論点であったが、ヴェーバーは、特に時間的要素に言及せずに、「整合型 (または、純粹目的合理的行為の理念型)」という、研究者にとって、目的合理的な行為のモデル (典型) を作成し、それと他の具体的行為を比較するという手法で、社会状況と行為の経過や結果をもとにした研究者の客観的な判断と行為者自身の主観的な判断 (動機) とのあいだに橋渡しをしている (Weber, 1913=1990 23, 24)。ヴェーバーは、自身を「歴史主

義の子」と称し、歴史学が客観的な科学として成立できる条件を真剣に検討していたが、その関心は、歴史的な各要素（概念）をどのように構成するかという点と、因果帰属という手法でその各要素を組み立てていくという点にあった。それゆえ、その研究内容は、歴史的な事象の影響関係と因果関係という点に比重があるのであり、時間概念が中心に据えられて歴史が論じられることはなかった。

ii) 観察者と行為者と間主観的世界——構成されるものとしての人格と間主観的世界

シュッツは、このように時間をめぐる視座がヴェーバーに欠如していたのは、ヴェーバーには現象学的な視点が欠如しているおり、「間主観的世界の安易な成立」を前提にしていたからであったと考えた。

ところでシュッツはフッサールの業績を熱心に研究していたが、実はヴェーバーも、彼の論文「ロツシャーとクニース」の中で、フッサールの『論理学研究』（特に、第2巻）への参照指示を6カ所を出している⁽³⁾。また、「理解社会学のカテゴリー」（以下、「理解」論文）の冒頭でも、フッサールの名に言及している。では、どちらの研究者もフッサールの業績に言及しているのに、なぜ、シュッツによる「間主観的世界」をめぐるヴェーバー批判は生じたのだろうか。それは、人間の思考や心理を客観的に研究することの可能性をめぐるフッサールの現象学の内容が1913年の『イデー』を境にして変更されたからというのが、一つの大きな理由であると思われる。ヴェーバーが言及しているフッサールの『論理学研究』（1900・1901年）では、主観化的科学の特別な方法は否定され、客観化的科学の方法との共通性が主張されている。ここでは、のちに前提されるようになった超越論的自我の存在は否定され、外的体験であろうと内的体験であろうと、行為者自身に現象するそのあり方に本質的な差はないと考えられていた。ヴェーバーは、この点に賛同しており、動機の主観的側面をどのように客観化するかということを書いていく。

彼は、この点について、「ロツシャーとクニース」のなかで、以下のように書いている。「われわれは——『自然』とは反対に——『体験された』生起を『体験される』がままに思惟^{グライウベ}することができる、というゴツトルの信念は論理的には正しくない」（Weber, 1906=1988, 196）。ここで、ヴェーバーはさらに、「われわれが実際に体験するところの^{グライウベ}もの」とは、「どんな『解明的な』解釈も、『体験作用』そのものの段階が去ってしまい、体験されたものが判断——それはそれとしての内容のゆえにもはや未分離のままの曖昧さにおいて『体験され』るのではなく『妥当する』ものとして承認される——の『客体』にされたのちに、はじめてこれをとらえることができる」（Weber, 1906=1988, 212）と述べている。つまり、体験は、対象化されて思惟の対象となったとき、初めて把握できるのである⁽⁴⁾。

そして、ヴェーバーは、「明証性」の問題も論じている。ここでは、動機理解の際にも、ある行為経過や行為者の表現を見て、その行為の意味や動機が明証性をもっているように見えても、それが妥当性をもっているとは必ずしも言えないと述べている（Weber, 1906=1988, 234）。これは、ヴェーバーの理解社会学の根本にかかわる問題であり、なぜ、動機理解が因果帰属を通して行われる必要がある

のかという問題と関係している。

ヴェーバーの「理解」論文の前半では、このように研究者や観察者が、如何に行為者自身の主観的意味を的確に把握するのかということが問題になっているが、この論文の後半部分では、ゲマインシャフト行為やゲゼルシャフト行為、ゲゼルシャフト関係、諒解などの概念が説明されている⁽⁵⁾。

たとえば、ゲマインシャフト行為の重要な構成要素として、「その行為が、他者の特定の行動についての予想 (Erwartung) や、そうした予想を勘案しつつ自己自身の行為の成果について (主観的に) 見積もった可能性 (Chance) に、意味の上で方向づけられる」(Weber, 1913-1980, 44) ことが挙げられている。ここでヴェーバーは、一定の自然現象についての予想と、他の人間の一定の行動についての予想の間に存在している、その予想をもった当人の行為を方向づける仕方の違いに留意している。後者の場合、主観的合理的に行為する者は、「自分は、他の人々の主観において意味をもった行動を予想することができるのであり、それゆえそうした行動の可能性についても、一定の意味をもった関係を根拠にしてさまざまな程度の確率であらかじめ目算を立てることができる、と主観的に信じていることが、その予想の根拠になりうる」(Weber, 1913-1980, 45) という。たとえば、他者と意思疎通をしあったり、協定を結んだりすれば、その事実にもとづいて、予想を主観的に立てることができる。つまり、「自分自身が考えている意味に従えば、その協定の『遵守』が他の人々にとって動機になると期待できる、と彼は信じているからである」(同上)。このことをヴェーバーは、「行為についての最も理解可能で重要な説明根拠となるのは、そのような可能性が客観的に存在すること、すなわち、この予想を抱くことが正当であるという、『客観的可能性判断 (objektives Möglichkeitsurteil)』として表現される蓋然性が多かれ少なかれ存在することである」とも書いている (同上書、44)。ここでは、単に研究者が行為者の動機を構成するという側面だけでなく、行為者 (A) 自身が、他者 (B) の主観的判断を推察し、ある期待をもち、それを自分の行為の根拠 (動機) としているという、主観的判断と主観的判断とのダイナミックな影響関係が見られる。ただし、そこでは、そのような期待を支える客観的な可能性 (条件) の存在が前提、または要請されている。その客観的可能性が「ただ単に他者の行為に関する予想」によって与えられているのではなく、「当の秩序に対する (主観的な意味において把握された)『適法 (Legalität)』が自分たちに『義務づけられている (verbindlich)』という主観的見解が彼らの間に有意な程度に広まっていると平均的にあてにできればできるほど」、人々は、単なるゲマインシャフト的行動を行っているのではなく、ゲゼルシャフト的關係にあることになる」とヴェーバーは述べている。(同上書、58-59)

ところで、ヴェーバーは、貨幣の使用や、言語の使用に見られるある現象に言及している。たとえば、「貨幣使用の帰結の総体は、全関与者の需要充足に関する秩序に準拠して行為がなされることによって達成された『かのような』かたちをとる」(同上書、78)。この「かのような」という側面にヴェーバーは注目している。

ヴェーバーは、ある種の事態を「諒解 (Einverständnis)」と呼ぶ。それは、以下のようなものである。「他の人々の行動について予想を立てそれに準拠して行為すれば、その予想の通りになっていく

可能性が次の理由から経験的に『妥当』しているということであり、その理由とは、当の他の人々がかの予想を、協定が存在しないにもかかわらず、自分の行動にとって意味上『妥当なもの』として実際に扱うであろうという蓋然性が客観的に存在している、ということである」(Weber, 1913=1980, 86)。諒解に基づいた諒解行為もゲマインシャフト行為の一種であると言える。ただしこれは、ゲゼルシャフト行為の場合と違って、法など外から見える強制的要素を備えている行為の基準は存在していない場合で、行為者たちが経験上知っている、状況とそれに対する他の行為者たちの判断とそれに基づいた行為パターン(対応)が行為の基準となっている場合の行為である。

この諒解に基づいた行為が成立するのは、シュッツの定義していた直接世界においてであり、時間と空間を共有する我々世界においてである。しかし、ヴェーバーは、ここでも彼の概念設定の際に、時間概念を持ち込んではいない。むしろ、「客観的可能性判断」という概念に言及している。つまり、ヴェーバーにとっては、研究者や観察者にとって、社会的世界の行為者たちが、いかに他者の判断を想定(期待)しつつ、自分の行為を方向づけているかを問うことは、研究者や観察者が行為者自身とともに、他者の判断を想定(期待)できる条件を問うことでもあったからである。諒解概念の場合は、行為者たちの世界に共有されている、行為者自身たちが互いに期待し合いつつ維持し合っている暗黙のルールが存在が前提されており、研究者や観察者もそれを考慮することができる。つまり、ここでは、研究者(観察者)、行為者たちが互いに抱く主観的意味(予想・判断)との複合的な関係が想定されている。この場合、行為者たちが自己の行為の意味や他者の行為の意味をどのように構成し合い、双方がどのような相互関係にあるのかは、シュッツのいうような「共に年老いる」世界で初めて想定することができる。諒解行為においては、客観的なかたちを取っている判断の基準は存在せず、ただ、行為者自身の経験知に基づいた予想しか存在しない。互いの経験知が互いの行為基準を維持、存在させ続けているのである。しかしまた、ヴェーバーは、行為の主観的意味の考察、すなわち動機理解の際に、明証性と妥当性を分けて、その関係に注意を払っていた。つまり、ヴェーバーの理解社会学は、一方で常に研究者あるいは観察者の眼差しを前提して動機の構成するという方法を取っていたという点でフッサールの『論理学研究』に見て取れる初期現象学的見地を採用していたと言える。しかし同時にここでは、行為者同士が、経験的一般規則についての知識に基づいて、互いの判断や行為への予想(期待)を持って行為することがその経験的一般規則を現実化させ、存続させる行為となっている場合が想定されている。行為がもつ規則性は、どんなに明証的であっても、必ずしもその動機理解の妥当性を示すものではないことはまさにヴェーバーが論じていた点であるが、期待することが事実形成につながるというこの諒解行為の概念は、行為者が単なる観察者から社会への参加者になることを可能にしている。それゆえ、この諒解概念を論じることで、ヴェーバーは、シュッツが、社会的世界について論じる際に、厳密な現象学的方法から踏み出していったように、彼の厳密な動機理解の方法から一歩、外へと踏み出したとも言えると思われる。これは、間主観的世界の成立について問うことの是非と深い関係のある問題である。

IV フッサール、マックス・ヴェーバー、シュッツ、ルーマン

本章では、ルーマンの見地と上記の研究者たちの見地との関係を、彼の時間や意味をめぐる論述に焦点を当てながら見てみたいと思う。

(i) シュッツの時間概念について

まずルーマンの講義録のなかに見られるシュッツへの言及としては、「社会学的文献では、アルフレッド・シュッツの初期の書籍『社会的世界の意味構成』(1932年)に、すべての人間は同時に年を取るというテーゼがありますが、それは、『一緒に (gemeinsam) 年を取る』ということの意味していると私は思います」(Luhmann, 2002 S.200)という個所が挙げられる。ルーマンは、時間について語る際に、時間が、過去、現在、未来という区分で語られることが多いことを指摘している。そして、アウグスティヌスにおいては、運動という概念が時間と結びついているという。それは人が時間ということでは何らかの次元や線分を表象し、すべてではないにしても個々のものが一定の速さで時間を越えてその線分の上を動いていくということであったり、または、時間の流れが私たちを通り抜けて流れていくといったものであったりするという (Luhmann, 2002 S.198)。しかし、ルーマンはここで、誰が何を区分するのか、誰が観察者なのかと問う。「人は、観察者を観察しようとするとき、その観察者を観察する観察者をもたねばならない」と述べて、観察者とは、まさに「その社会 (die Gesellschaft)」なのだと言っている (同上)。では、観察者は、いつ、時間を区分するのだろうか。ルーマンは、この問いを立てるのは、もう一人の別な観察者であるという。この観察者は自分自身を観察する観察者であり、また、なぜ自分は今、これを行わねばならないのかと考えるような観察者であるという。そして、その観察者が、時間の観察を始めるそのときに、まさに時間の区分を始めるという。つまり、今、起きることは今起きるのであり、以前に起きるのでも後に起きるのでもなく、「起きることはすべて同時に起きる」とルーマンは述べている。ここで、シュッツの「人間は同時に年を取るというテーゼ」が引用されている。みな、一緒に同時にこの今を生きているのであり、人より遅く、或いは早く、「今」を体験することはできないのである。人が同時性に区切りを入れる時、過去と未来が同時に設定されるという。それゆえ、未来と過去は、いつも同時に現れ出るのである (同上書、S.202)。このような時間についての考察のなかで、ルーマンは、シュッツの見解を支持している。

(ii) フッサールへの批判と評価

ルーマンは、彼の *Einführung in die Systemtheorie* の中で、フッサールが、彼の『超越論的現象学』の中で、「間主観性は解き得る問題であることを前提にしている」ことに批判的に言及している。ルーマンは、「観察者として私たちが、意味のあるものと意味のないものとを区別することができるという前提」を疑っている。彼は、「意味のあるものと意味のないものととの区別は意味があるので

しょうか」と問い、また、「それは誰にとっての意味なのか」と問うている。その問いに対する哲学による支配的な回答は、意味とは主体に関わるものであり、その際、生きて自分のことを熟慮する個人という意味での主体が考えられているという。「……フッサールは、その超越論的現象学のなかで——特に科学と技術の批判に取り組んでいる部分において——体験 (Erleben) は、具体的な意味をもたらす意識のはたらきと共に経過しなければならないと要求している。……しかし、そのことはまづもって間主観性が説き得る問題であることを前提としている。というのは、各々の主体が自分自身で意味を生産し、意味を構成し、それが意味のある意味か、意味のない意味であるかを評価するならば、何が主体の間で生じるのか、そして、よく言われている『間主観性』の領域とはというのは存在しているのか」とルーマンは述べて、それが「どの主体にとっての意味なのか」と問うている (Luhmann, 2002 S.224)。そして彼は、意味カテゴリーを意味的に体験される心的システムとコミュニケーションシステムの2つに分けつつ、私たちが名宛人をもはや持たず、私たちが観察できる観察者も持たず、一方で意識、他方で社会的コミュニケーションをもつ限りであるということが、意味概念の拠り所を奪うのだと述べている。

しかし、ルーマンがフッサールの見解を取り入れている点がある。ルーマンは、フッサールの現象学的分析の多くのものは、彼の遺稿によって示されているが、彼自身もまた出版していること、特にこの現象学的分析は、1913年の『イデー』における優れた詳述や、のちの『経験と判断』のなかで得られると書いている。「彼の考えでは、——いつも主観に関連させて考えられていますが——主観、意識は志向的に、したがって作用のかたちで働きます。その志向的な意識の活動における現実化は、何かあるものへと向けられています。人は、対象、人間、シンボルなどを、フッサールが述べているように、いつも他の可能性を指示しているある一つの地平において同定しているのです」 (Luhmann, 2002 S.230)。さらに、「すなわち、すべてのもの、シンボリック表現ともの (Dinge) は、フッサールが言うように可能な規定性、あるいは特定の様式の規定可能性という一つの地平のなかで他の可能性を指示しているのです」とも書いている。

この地平という概念は、その「指示作用」との関係で評価されているのであるが、ルーマンは、この概念を時間概念との関係でも説明している。「地平というフッサールの概念は、ある先に (Vorher) を考え、この先に新しい先に (Vorher) 組み込むこと等々を可能にするのです。……地平は位置がずれる——というメタファーが表しているように、地平のみが、一種の永劫性を持っているのです」 (同上書、S.209) という個所や、「フッサールにおいては、未来の決定を目指すという志向的作用が重要です」 (同上) という個所がその例として挙げられる。

(iii) マックス・ヴェーバーの「諒解」概念との関係について

マックス・ヴェーバーへの言及は、1984年に刊行された『社会システム理論』の第8章の第8節「期待の再帰性」のところに見いだされる。ルーマンは、期待の複合的な状態は見通し得ないと述べて、「マックス・ヴェーバーが、期待によって方向づけることの絶対的必要性を容認することを躊躇

したのは、この理由による（そうはいつでも、彼の『諒解 (Einverständnis)』概念は、まさに、それと適合しているのだが）」と書いている (Luhmann, 1984=1995, 571)。

ルーマンは、社会システムの場合、期待は、そのなかで社会システムの構造が形成されている時間形式であると考えているので、「期待」概念と「時間」との間には、深い関連性があるということになる (同上書、566)。その点は、以下のような、彼の言葉の中にも見て取れる。「期待を抛り所にして社会システムの時間地平が現れる。たまたま何が期待されているかが決まるやいなや、それを起点としてその未来や過去が何であるのかを見積もることができる。期待をとおして、時間はいわば可動的に、すなわち、時間それ自体がある時点から他の時点へと移動できるように編成される」(同上書、755)。

このように考えていくと、シュッツによって、ヴェーバーの理解社会学には、時間概念が欠如しているという批判が行われたが、ルーマンの指摘を考慮するとき、ヴェーバーは、「諒解」概念に言及し、期待の意義を考慮している個所で、主体の概念や、研究者や観察者と行為者自身の主体的選択といった概念を超えるかたちで未来の可能性を読み込んで、社会的関係に参加する行為を想定していたと言えるように思われる。

マックス・ヴェーバーの理解社会学における「諒解」概念は、「その予想が可能である」と判断できる経験的に合理的な根拠を持つ予想(期待)を介して、社会的行為者たちが相互に行為を行い、かつ、その結果として、また、その予想が当たる基盤が維持、形成されるという視点が導入されており、ダイナミックで相互行為的な要素が見て取れる。このいわゆる「研究者(観察者)―行為者」図式を越える視点は、社会的行為者たちが相互に観察者であり、行為者であるというダイナミックな社会システム論を説いていたルーマンの見地に合致するものを持っていたと思われる。

結び

以上のようにルーマンは、間主観的世界の成立を、個人の認識から出発して問うことの限界を指摘し、『デカルト的省察』に見られるようなフッサールの見地とは一線を画したシュッツの「一緒に年をとる」という「自然的態度」の見方に賛同し、フッサールについては、その「地平」をめぐる考え方を彼の講義でも支持していた。それは、それが、彼の「時間」概念と適合し、「過去」―「現在」―「未来」というように区切られ、順番にそれらが展開し行くような観念を覆し、常に「現在」のみがあり、その現在の地平に、さまざまな「可能性」が、すでに存在しているという考え方の基盤となったからである。この、ルーマンが、ヴェーバーの「研究者(観察者)―行為者」図式を越える視点に関心をもち、彼の「諒解」概念に言及している点は、ヴェーバーの「諒解」概念を理解するうえでも大いに参考になると思われる。

【注】

- (1) Radbruch, Gustav, 1902, Von Kries, Johannes, 1888, (クリース・フォン・ヨハネス「客観的可能性という概念とその若干の応用について」、山田吉二郎・江口豊訳、『メディア・コミュニケーション研究』59: 137-189頁、2010年) 参照。
- (2) 引用のなかの引用個所を示す「 」は、『 』に変更する。この個所には、*Logische Untersuchungen, 4 Aufl. Bd II*, Halle 1928 S.80f. との引用注が付いている。
- (3) 『ロッシヤーとクニース』の本文や注などで、*Logische Untersuchungen* 第1巻・第2巻(初版)のS.330、S.333、S.340、S.607、S.637、S.703への参照指示を出している。
- (4) この論点に関して、ヴェーバーは、「内的経験の特殊な『確実性』およびより高次の『実在的内容』に反対するものとして、フッサールの *Logische Untersuchungen, Beilage zu Bd. II*, S.703. をも参照」(Weber, 1906 = 1988, 208頁, 210頁) と記している。
- (5) 後半部分の方が先に書かれていた。

【参考文献】

- Husserl, Edmund *Logische Untersuchungen, Erster Band*, Halle A. S. Max Niemeyer, 1900 (エドムント・フッサール『論理学研究』1 立原・松井訳、みすず書房、1968年)
- *Logische Untersuchungen, Zweiter Band*, Halle A. S. Max Niemeyer, 1901 エドムント・フッサール『論理学研究』2, 3, 4 立原・松井訳、みすず書房、1974年(4のみ1976年— [1928] 1966, „Zur Phänomenologie des inneren Zeit Bewußtsein (1893-1917)“, *Husseriana Bd. X*, Hrsg. von Rudolf Boehm, Den Haag: Martinus Nijhoff.
- [1912-13] 1952, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie*, 2 Buch, Phänomenologischen Untersuchungen zur Konstitution, *Husseriana Bd. IV*, Den Haag: Martinus Nijhoff.
- [1913] 1950a, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie*, Erstes Buch, Allgemeine Einführung in die Phänomenologie, *Husseriana*, Bd. III, Den Haag: Martinus Nijhoff. = 渡辺二郎訳『イデー I-I 純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想 第1巻 純粹現象学への全般的序論』みすず書房 1979年
- [1939] 1964, *Erfahrung und Urteil: Untersuchungen zur Genologie der Logik*, redigiert und herausgegeben von Ludwig Landgrebe, Dritte unveränderte Auflage Claasen Verlag. Hamburg: = 長谷川宏訳『経験と判断』河出書房新社1975年
- Husserl Edmund und Eugen Funk, 1932, 1933/34 *Die Idee einer Transzendent alen Methodenlehre* (VI. Cartesianische Meditation) Teil I Texte aus dem Nachlass Eugen Funks (1932) mit Anmerkungen und Beilagen aus dem Nachlass Edmund Hesserls (1933/34) Herausgegeben von Hans Ebeling, Jann Holl und Guy Van Kerckhoven, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht = 新田義弘 千田義光訳『超越論的方法論の理念』岩波書店 1995年
- Luhmann Niklas, [2002], *Einführung in die Systemtheorie*. Herausgegeben von Dirk Baecker, Carl-Auer-System Verlag. = デイルク・ベッカー編、土方透監訳『システム理論入門 ニクラス・ルーマン講義録【1】』新泉社 2007年
- [1984], *Sozial Systeme,; Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main. [English Translation] [1995], by John Bednarz, Jr, with Dirk Baecker, Stanford University Press, Stanford. = 佐藤勉監訳『社会システム理論』(上)、1993年、佐藤勉監訳『社会システム理論』(下) 1995年 恒星社厚生閣
- Radbruch, Gustav, 1902, *Die Lehre von der adäquaten Verursachung*, Abhandlungen des Kriminalistischen Seminars an der Universität Berlin, Hrsg. von Franz von Liszt, NF, 1 Bd, 3. Heft Berlin
- Schütz Alfred, [1932] 1960, *Der Sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Springer-Verlag, Wien. English translation [1967] by Nortonwestern University Press. = 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社1982年
- Von Kries, Johannes, 1888, „Über den Begriff der objektiven Möglichkeit und einige Anwendungen desselben“, *Vierteljahresschrift für wissenschaftliche Philosophie*, XII
- = 山田吉二郎・江口豊訳「客観的可能性という概念とその若干の応用について」、『メディア・コミュニケーション研究』59: 137-189頁、2010年。

Weber, Max: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen, (以下、G.A.z.W. と略す) 所収の論文

(1) (S. 1-145) 'Loscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie', (1903-06) = 松井秀親訳、『ロツシャーとクニース』未来社、1988年(底本: G.A.z.W., 2. Aufl., 1951, S. 1-145)。

(3) (S.215-290) 'Kritische Studien auf dem Gebiet der kulturwissenschaftlichen Logik', (1906) (『歴史は科学か』森岡弘通訳 みすず書房 1965年 99-227頁)。

(4) (S.427-474) 'Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie', (1913) (『理解社会学のカテゴリー』(本論文中の略称: 「理解」論文) 海老原・中野訳、未来社、1990年(底本: *Logos. Internationale Zeitschrift für Philosophie der Kultur*, 4 Band, 3 Heft, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1913, S.253-293))。

——'Soziologische Grundbegriffe', *Wirtschaft und Gesellschaft*, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1922所収 (『社会学の根本概念』、清水幾太郎訳、岩波書店、1972年)。

【Abstract】

A Study about the Social Theories of Weber, Schutz and Luhmann — With Referring to Husserl's Phenomenology —

Kyoko UTSUNOMIYA

In this paper I make arguments regarding the relationships between the social theories of Weber, Schutz and Luhmann, referring to Husserl's Phenomenology.

Schutz criticized Weber's Interpretative Sociology (Verstehende Soziologie), because he didn't give refer to the time-concept.

Schütz's theoretical basis was established by Husserl in his study of the internal time-consciousness, but a new turn to his argument has emerged.

Schutz adapted Bergson's concept of the *durée* and referred to his concept of simultaneity; Schutz expressed his idea about the simultaneity of two durations or streams of consciousness in the context of "the phenomenon of growing older together."

Weber's interpretive sociology strives to examine how observers (sociologists) can properly approach the subjective meaning of social actors.

He made clear distinctions between the standpoint of an observer and one of an actor, but we can also see that it is difficult to identify an explanation on the concept of time in Weber's works. Weber referred to Husserl's work, *Logische Untersuchung*, in his thesis*, but there are neither the concept of transcendental ego nor of consciousness-stream, nor of inner time-consciousness in Husserl's *Logische Untersuchung*.

I pointed out that Weber referred to the social relations and especially 'Einverständnis'. (Luhmann referred to this Weber's concept).

Here we can identify the relationship between social actors such that they can confirm the validity of their expectation through their own experiences.

Finally I examined Luhmann's relation to the views of Schutz, Weber and Husserl.

These are as follows;

1. Einverständnis (Weber)
2. 'gleichzeitig altern' (Schütz)
3. Horizont (Husserl)